

## 大学院教育プログラムとしての書評誌刊行

阿部 潔 (大学院 GP プログラム・サブリーダー)

『KG/GP 社会学批評』は本号第4号をもって正規号としては終刊する。2008年度より採択されたGPプログラムの一環として開始された本誌の刊行は、当初の予想以上の成果をあげることができたと秘かに自負している。最終号の刊行に際して、これまでの軌跡を振り返るとともに今後引き継がれるべき課題について述べたい。

大学院生への図書助成と併せて書評誌を発行することを決めた当初、正直に言えば関係者のあいだで、どの程度の水準の論文を掲載することができるかについて確信があったわけではない。むしろ、漠然とした不安がそこで共有されていたように記憶する。基本的な編集方針策定の際に、掲載論文は「査読」を通過したものにかぎるとの原則にこだわったのは、GPプログラムの成果として雑誌を刊行するからには、一定水準を維持することが必須の条件であると考えたからである。

だが、第一号に向けた論文が集まった時点で、私たちは「厳しい現実」に直面する。投稿された論考には各人の意気込みが感じられた。しかし同時に、それは「査読」を容易に通過するレベルに達したもののばかりではなかった。「書評するとはなにか」、「書評を通じた論文とはなにか」。そうした基本的な前提が必ずしも共有されていないことを、具体的な査読作業の過程で私たちは痛感した。それは同時に、GPに関わる私たちひとり一人が自らの研究と教育のあり方の反省を強いられる機会でもあった。

「パンドラの箱を開けたようなものかもしれないな」

編集会議の際にメンバーの一人が呟いた一言は、書評誌刊行をはじめとするGPプログラムの事業が直面する課題を暗示すると同時に、その意義を示唆していたのかもしれない。

厳しい現実を目の当たりにしながらも、挫けることなく「査読付き論文」の水準確保に向けてプログラムを推し進めることができたのは、ひとえに二人の助教の貢献のお陰である。院生個々人の研究テーマを理解したうえで、論文執筆に際しての解決すべき課題を指摘し、粘り強く執筆指導を続けた彼らの尽力と献身がなければ、書評誌の刊行は到底できなかつただろう。その意味で、本誌は投稿した院生たちとそれをサポートした助教たちとの共同作品にほかならない。

助教たちによる指導の過程から見えてきたのは、院生の多くにとって自分の研究に関連した重要文献を「書評する」ための知的トレーニングが、必ずしも十分に積まれていないという現実であった。そのため「書評する」に相応しくない本を選定してしまい、その結果、満足な書評論文が書けない事例が散見された。ここで見えてきた課題は、書評論文を執筆するうえでなによりも大事なことは「どんな本を選定するか」であるという基本的な点だ。ごく当たり前と思われるこの事実が、厳しい現実への対応の過程で再確認された。

次に私たちが直面したのは、「書評」と「論文」の関連付けをどのようにするのかという点であ

る。書評論文には、書評と論文の双方が期待される。対象とした本の内容を的確に評すると同時に、筆者なりの問題関心や分析視角から、その本自体の意義を論じること。これが充たされるべき条件にはかならない。当初私たちは、単なる書評に終わることなく、各人の研究テーマと問題関心に基づく論文を書くことを指導の中心に据えた。その方針自体は決して間違っていない。しかし、独自に「論じる」ためには的確に「評する」ことが不可欠である。著者の議論内容を内在的に再構成できてはじめて、外在的な視座からの批判や論評が意味を持つ。私たちが直面したのは、投稿者たちが十分な知識をもとに対象とした本を書評することができていないという現実であった。もちろん、それは執筆指導の範囲内だけで対応できるものではない。本 GP プログラムの主題である「ソシオリテラシーの涵養」が為されてはじめて、期待される水準の論文執筆が可能になる。その意味で、助教の指導のもと院生たちが的確な書評を書くうえでのトレーニングを積んだことは、具体的な課題に即したソシオリテラシー涵養の試みとして大きな意義をもっていた。

書評論文への取り組みを通じて見えてきた諸課題に対応するうえで「査読制度」が大きな役割を果たしたと思う。匿名の委員による査読は掲載される論文の質を保障するだけでなく、GP プログラムの趣旨に照らし「教育的配慮」のもとに行われた。つまり、投稿された論文の掲載可否の判断を下すだけでなく、問題点や改善点を具体的に指摘することを通して院生の研究活動をエンカレッジすること。それが目指されたのである。そうした教育方針に根差した査読制度のもとで、多くの投稿論文が改稿を重ねることを通じてより質の高いものへと書き直されていった。さらに最終号では、査読に際して委員による評価に加えて関連領域研究者によるコメントを付した。そのことで、より内在的な観点からの指導が可能になった。こうした粘り強い教育プロセスの積み重ねにこそ、GP 事業としての書評誌刊行の意義があったのではないだろうか。

教育とは長い時間を要する営みである。その点で三年間というかぎられた期間で成し遂げられることは、極めて限られている。改めて言うまでもなく「ソシオリテラシーの涵養」は一朝一夕に果たされるものではない。しかしながら、今こうして最終号の刊行を迎え、そこに掲載された諸論文を目の前にすると、査読付き雑誌刊行という困難な試みを続けてきたことの成果がまざまざと感じ取られる。もちろん、個々の論文にはいまだ不十分な点や課題が残されている。だが、書評と論文の双方が求められる投稿論文の執筆に携わることを通じて、院生たちは着実に「ソシオリテラシー」を我がものとしていったように見受けられる。

繰り返しになるが、GP プログラムにおける書評誌が実りあるものになり得たのは、ひとえに院生たちの指導と相談に関わった助教二人の貢献の賜物である。さらに、各投稿者たちが彼らの指導を受けながら、匿名の査読委員から指摘された問題点や課題の改善に真摯に取り組んだからこそ、プログラム開始当初と比べて格段に質の高い論考が数多く投稿されるようになった。それこそが最大の「成果」である。

GP プログラム終了後においても、4号にわたり続けられた書評誌刊行の成果を、なにかしらのかたちで継承していくこと。それが本事業に関わったすべてのものに課された、今後の使命にはかならない。